特集論文

都市における環境再生とその担い手像
—守山市の守山ほたるパーク＆ウォークの調査から—

柏尾　珠紀

Environmental conservation supported by farmers and city residents in semi-urban area: A case involving a Moriyama firefly festival in Moriyama city, Shiga prefecture

Tamaki KASHIO

Special appointment Professor, Research Center for Environment and Sustainability

Moriyama city in Shiga prefecture succeeded in restoring a waterfront environment for fireflies to flit about as they did decades ago. The city office enacted the regulations to protect fireflies and to keep canals and streams well-groomed. The city has been hosting a firefly festival since 2004 in which the people can stroll around the city to see the bugs fly. This study investigates who maintains and preserves the canals in the city and how the activities of various actors, including farmers and volunteers, are coordinated based on interviews with leaders of local organizations, farmers, residents, and related NPO members. The results of the study reveal, first of all, that daily maintenance of the canals was carried out by the farmers who used the canal water to irrigate their paddy fields before they began to use water provided from a newly constructed dam. Now, they feel it is difficult to maintain the canals, because they do not get active support from other residents in the area. Secondly, however, there is an NPO that helps the farmers to some extent by conducting water quality checks, releases snails into the rivers and canals as feed for fireflies, and provides various supportive services. This NPO also plays as important role in forming a network of related actors that include farmers, volunteers, and local government. This study suggests that the conservation of natural assets requires not only various actors but also a coordinator to connect them.

Key Words: canal management, environmental activities

はじめに

本論の目的は、地域のシンボルであるホタルの生息環境を再生し、ホタルが再び飛び交うようになった調査地において、ホタルの生息域の環境がどのように保全されているのかについて、検討することである。そしてその際、維持管理を担う個人や団体が取り結ぶ諸関係に注目する。

近年では、自然や生き物が生息できる環境を再生して、それを地域活性化の資源として位置づけたまちづくりが散見される。ホタルや清流など近代化の過程で喪失した自然を再生させる活動である。だが、そのような自然は取り戻しても多くの場合、地域のなかで資源化される過程で維持管理にまつわる諸問題の洗礼を受ける。またあるいは、地域活性化の資源となったとしても、行政からの活動補助金などが途絶するとともに、維持が困難になることもある。環境再生後における維持管理は大きな課題のひとつといえるだろう。

滋賀大学環境総合センター客員教授

自然資源管理のあり方や主体をめぐっては、利用や管理が一体化したコモンズのような共有財産を議論することが多い。他方で､現存の水路のある田園風景の管理について、住民参加や制度、組織に注目して考察したものもある（西城戸・黒田 2010)。だが、喪失したのちに再生された自然がどのように維持されているのかが議論されることはあまりない。

そこで再生された資源を考えるにあたり、地域の資源には人々をめぐる社会関係が歴史的に蓄積しているという鳥越（2007）の指摘は手がかりとなる。というのも、大都市周辺の地方都市の多くはいずれも農村起源であり、そのような地域ではホタルが飛び交う水路や河川、土手などは農村集落の社会関係の歴史的蓄積のうえに維持管理されてきたと考えられるからだ。

だが現在、多くの農村起源の地方都市は、農業者と転入者の居住する混住化が進んだ場所である。このような現代的な都市の特質を、本質的な問題としてとらえる池上（2011）の視点は、混住化の進展した地方都市における資源の維持管理主体を考える際に示唆的である。つまり、農村起源の都市を、都市の衣をまとう農村という視点から考察することで、再生され現代的な意味を付与された自然資源の管理とその特徴を見極めることが可能だと考えるからである。

このような視点から、本論ではホタルの生息域がどのように日常的に保全されているのかを明らかにするために、水路の保全活動をおこなう集落や個人と各種の市民団体へのヒアリングをおこなった。そしてそれらをふまえて、都市のなかにある農村的社会組織の機能や意味を考え、再生した生き物が生息できる環境の保全について検討する。

調査地として取り上げるのは滋賀県の守山市である。同市では地域シンボルであったが絶滅してしまったゲンジボタルが生息できる環境を、約 20 年かけてもう一度取り戻した。そしてその後は、ホタルを保護するために条例を制定し、季節の風物詩として初夏のホタルを鑑賞するイベントを開催しているのである。

以下では、再生した環境の保全活動の担い手を明らかにするために、次のように進めることにする。1 では同市におけるホタルの保護の動向とホタルを活用したまちづくりのイベントを紹介する。官民一体で開催するこの行事を主催するメンバーの構成とその役割を確認する。2 では、ホタルという流域で生息する生き物の生存環境がどのように保全されているのかについて、具体的に水路に関係する集落でおこなわれている諸主体の保全活動について、ヒアリングを中心に検討し、各々がおこなう行為の意味とその変化を考える。それをふまえて 3 では、各様の活動がイベントの際にどのようにネットワーク化されているのかを考える。最後に、全体をまとめて、ホタルが飛び交う水辺環境がどのようにして都市のなかで保全されているのかを明らかにしたい。

1、調査地の概要

1－1　調査地の概要とホタルの保全

守山市は琵琶湖の東岸に位置しており、京阪神へ通勤が可能なベッドタウンとして宅地開発が進められてきた地域である。駅周辺部には工場も立地している。2015 年 2 月の人口は 80,852 人、世帯数は 29,942 戸となっている。同市では、「のどかな田園都市」をキーワードに活力と生きがいある暮らしを目指したまちづくりが行われてきた。なかでも、水辺環境の再生や中心市街地活性化事業はその中心となっている。

このような守山市にとって、水辺環境を象徴するのが当地にゆかりのあるゲンジボタルであり、官民一体となって絶滅した地元のシンボルであったゲンジボタルを復活させた経験を有している[1)]。行政は 1999 年に、ホタルを保護するだけでなく、ホタルが飛び交う地域を市内でよりいっそう拡大させようと、「ほたる条例」を制定した。条例では市内 9 河川をホタル保護地区に指定するなど、積極的にホタルと環境保全をまちづくりの中心に位置付けてきた[2)]。

2013 年 7 月 1 日からはこの条例が改正されて、市内全域の河川が「ホタル保護区域」に指定された。ホタルの幼虫や成虫の捕獲の禁止、ホタルの餌であるカワニナの捕獲禁止、ホタルが生育する河川を汚濁させることが禁止された。現在では、河川や土手を含めて市内の散策コースの 13 箇所がホタルの保護地区とされている[3)]。

このようにホタルの保護に努めて、市内の河川を乱舞するホタルを地域活性化の資源にして、ホタルを鑑賞する観光イベントも始められた。だがその一方で他方では、開発の進行にともない、ホタルが乱舞するにも関わらず保護地区から指定が解除されるような事態も発生している。同市では、開発や観光による地域活性化と環境再生や保護による環境保全とのせめぎあいをしながら、まちづくりが進められているのである。

同市におけるホタルの再生や水辺環境の保全を語るにあたり、紹介しておかなくてはならないのが地元の環境

NPO 法人びわこ豊穣の郷（以下では NPO と略して記す）である。同組織は、1996 年から環境再生を志向した活動を始めた市民団体であり、2004 年に NPO 法人に、2014 年には認定 NPO 法人となった。かつて同市がホタルの飛び交う水辺環境を取り戻した際に、重要な役割を果たしたメンバーも含まれる組織である。

現在同組織は、市内でホタルの育成や保全活動をおこなうだけでなく、水質調査や外来植生物の除去、川づくりの研修や地域における環境教育活動も担っており、広い視野で環境保全を志向した活動を展開している。また、この組織は必要に応じて、行政と地元や外部の諸団体をつなぐ橋渡しもおこなっている[4)]。

1－2　ホタルを鑑賞するイベント

このような市民活動にも支えながら、同市では環境にまつわるイベントが数多く開催される。なかでも注目したのが「守山ほたるパーク＆ウォーク」（以下ではパーク＆ウォークと略して記す）である[5)]。この行事は 2015 年で 12 回目を迎える同市の観光事業である。パーク＆ウォークは、ホタルを鑑賞するために市内外から訪れた訪問者が徒歩で散策し、ホタルの飛翔を楽しむというものであり、2004 年から NPO と市の環境政策課が中心となり開催を始めた。

このようにホタルを鑑賞することが、イベント化された背景には以下のような事情があった。ホタルが市内のあちこちで再び飛び始めそれが広報されると、都市部でホタルを鑑賞できるということで夜間に市内外から多くの人々がホタルの鑑賞に訪れるようになった。静かに鑑賞するだけならば問題はなかったのだが、規制もなかったため深夜の騒音問題や住宅街での違法駐車の問題が頻発した。ホタルが飛翔する河川のそばに静かに暮らす地域住民にとっては、平穏な日常が脅かされる事態となり行政に対して苦情を寄せたのである。

そこで、訪問を禁止することよりも、ホタルの飛翔情報を提供し、鑑賞する場と鑑賞のルールを決めたイベントにしたのである。車で訪れた鑑賞者には車を止める場所を提供して、ある程度決めた散策ルートを歩いてホタルの飛び交うさまを鑑賞してもらうイベントに仕立てたのである。パーク＆ウォークという名称には、静かに市内を歩きながらホタルを鑑賞し自然を味わってほしいという意図が込められているのである[6)]。

以下では、この行事がどのような組織によって運営されているのかについて、筆者も参与観察者として関わった 2014 年の行事から具体的にみていきたい。

1－3　パーク＆ウォークの実行委員会組織とその役割

パーク＆ウォークは「守山ほたるパーク＆ウォーク実行委員会」によって主催されている。図 1 は実行委員会の組織構造である。ここにあるように組織は、全体会と幹事会のもと，4 つの部会と事務局が配置された構造となっている。

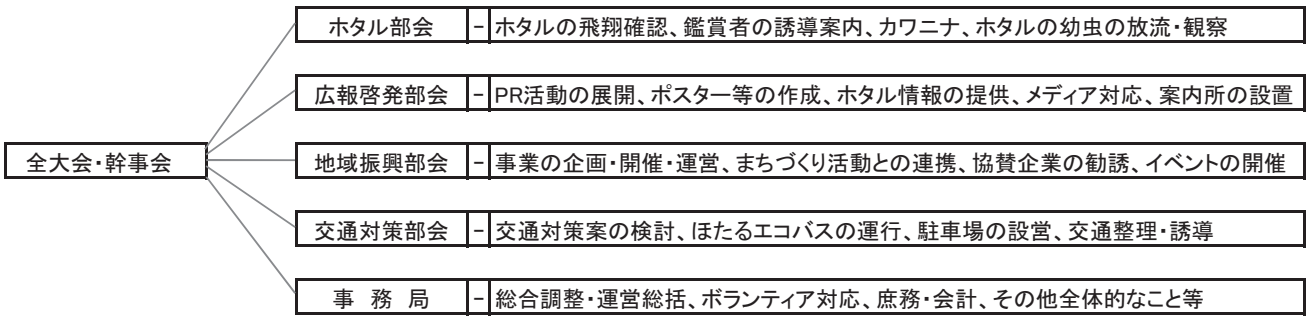


図 1　守山ほたるパーク＆ウォークの実行委員会組織

図にある各部会の役割は以下のとおりである。ホタル部会は、ホタルの飼育、放流、観察、飛翔調査とその情報の収集など、ホタルにかかわることを全般的に担っている。イベント時だけでなく、年間を通してホタルの育成にかかわる活動を担っている。

広報啓発部会は、主にPR活動を中心に担う。飛翔情報の発信やメディア対応が主な役割である。ここでの啓発の意味するところは、狭義にホタルを採取しないように注意喚起をすることではない。水路のあるまちを散策して水辺を飛び交うホタルを鑑賞することで、「ホタルが乱舞するような水辺が暮らしのなかにあること」が同市のすばらしさなのだと伝えるパーク＆ウォーク行事の理念を普及させることなのである。

地域振興部会は、商店街や自治会と連携しイベントを盛り上げ、他方では協賛企業の勧誘もおこなう。そして、週末のパーク＆ウォークで重要な移動手段となるバスの運行を担うのが交通対策部会である。鑑賞者は車を駐車場において、バスを利用して好きなホタル観賞スポットを散策することができる。交通部会は、バスの運行だけでなく駐車場の設営や交通整理、誘導案内などを一手に引き受けている。

このような体制でイベントは開催されているのであるが、各部会はイベントの10日間だけ何らかの役割を担うのではない。約6ヶ月にわたり計画的に準備をおこなっていた[7)]。では、市内の広い範囲において、ホタル河川はどのように保全され、ホタルの幼虫の放流やホタルの成虫の発生状況の確認は誰がどのようにおこなっていたのだろうか。

表1　実行委員会参加者一覧

地元					行政	外部
自治会	団体		企業			
A自治会	びわこ豊穣の郷	文化体育振興事業団	旭化成	滋賀銀行守山支店	環境政策課	ボランティア
B自治会	目田川会	守山商工会議所	魚和	双栄自動車工業	市職員互助会	学生
C自治会	青いびわ湖	守山商工会議所青年部	近江鉄道あやめ営業所	富総		社会人
D自治会	守山ホタル会	守山銀座商店街	関西アーバン銀行守山支店	ラフォーレ琵琶湖		大学
E自治会	ほたる通り商店街	守山青年会議所	作陶美秀	みらいもりやま21		
F自治会	観光物産協会	駅前総合案内所	S行政書士事務所	M環整		
Gホタル会	観光物産ボランティア協会	守山幼稚園	サントライス	ループプランニング		

表1は2014年度の実行委員会の構成団体一覧である。実行委員会組織の構成を見てみると、自治会や行政などの日常的で基本的な生活組織から、商工会や企業などの経済的な団体、市民活動団体組織というように、多様な団体が参加していることがわかる。

また、ほとんどが市内にかかわりを持つ地縁的な関係者である。補足しておくと、実行委員会に参加している自治会は、農村集落の自治会だけでなく、駅前のマンション住民で構成されている自治会も含まれている。

参加企業は、地元の自営業者も多いが、市内に立地している一般的な企業も複数含まれている。これらの企業はよくある協賛だけの位置づけではなく、実際に会議やイベント期間中にも参加した。そしてこのような企業や事業所と連携しているのが市内の商店街組合や商工会、観光物産協会などの経済主体である。

さらにこれに加えてイベントの開催中は、ホタルの知識などを提供するボランティアが多数参加する。2014年度のパーク＆ウォークでは、市内外から620名のボランティアの参加があったと記録されている。ボランティアの参加者数の多さからも広いネットワークの存在と支援者の多さをうかがい知ることができるだろう。

ホタルという年間を通して手当が必要な生物が毎年飛翔し、ホタルを観賞するイベントを恒例化できている背景には、ホタルの育成にまつわる環境整備や水路の保全活動を担う人々が市内の広い範囲に存在していることが想定された。そこで以下では、ホタルの飛翔を可能にしている日常的な環境維持活動、またあるいは、ホタルの育成と水辺環境の維持管理がどのような仕組みになっているのかについて、詳しくみていきたい。

2、ホタルの保全にかかわる組織と人々

2－1　ホタルの飛翔を支える地域組織

ここでは、ホタルの生息環境を守るために水路や河川が日常的にどのように維持管理されているのかをみていこう。駅周辺は都市化や宅地化が急速に進展し農地はないが、現存する水路や河川には、下流部の田畑に供給される農業用水が流れている。実行委員会に参加している各集落の自治会は、定期的に水路や河川の清掃活動をおこなっていた。水路は開渠の場所が多くあり、せせらぎのある水路は住民にとっても憩いの空間である。その水路のせせらぎを滞ら

せないように、自治会によって清掃や除草作業がおこなわれているのである。

実行委員会に参加している自治会は、既述のように一つを除き農業集落である。農業者にとって水路の水は重要な農業用水である。同市内には渇水や水争いの歴史を持つ集落もいくつかあり、農業集落の自治会は水に高い関心を寄せてきた人々の集団であるといえる。だから、水路の状態や水量を目視することも習慣になっているという。たとえば、A集落の自治会で一斉清掃をする際のことを自治会役員は以下のように述べた。

「自治会の掃除のまえには、（水路の）どこがどのような状態になっているか、どこの雑草が繁茂しているのかなど場所を確認したり、例年との比較で、今年の水路の様子はどうかなどを、頼んでいるわけではないけれど、役員だけでなくみんな毎回必ず詳しく確認して言うてくれます。毎年のことやから、この時期にしたら水が少ないとか、どこの土手が崩れやすいとか、どこの水路には雑草が多いとかみんな日常的にわかっている。私も毎日みているけれど、掃除の前にもう一度確認はしています。そんなことをみんながそれぞれやっているんや。それで掃除の日にみんなで集まったら、今年の水はどうやとか水路の様子はこうやとか、みんなが自分のみてきたことをわいわい言うので、集落内の水路の全体像をみんなが知っているというわけですわ」

ここからは、A集落の人々が、必ずわざわざ水路の様子を自分の目で確認していること、そしてそれは、年間を通して当たり前の日常であり習慣になっていること、さらに、季節ごとの水路の状態を判断する基準を各自が経験的に有していること、が明らかであった。農業集落の各自治会メンバーは、経験に裏打ちされた各様の地元の水路に関する蓄積された知恵をふまえて、水量や水の在り方を検証しながら水路を観察しているのである。そのうえで自分たちにとって理想的な水路の状態を維持するための活動をおこなってきたのだと考えられた。営農に直接関わる水に関する情報は重要であり、共有する必要がある。さらに、A集落では、清掃を実施するにあたっては通常付き合いがない住民へも情報の提供をおこなっていた。

「去年はこの場所でホタルが大量に発生したから、この場所の除草作業は刈り過ぎないように気をつけないといけない。この敷地はマンションの裏なので、マンションの人がうっかり草を刈ってしまわないように、すまんけど、今年も気をつけてもらうように住民の人に声をかけておかないとあかんな」

農業的な判断に基づかないこのような行動からは、農業集落の自治会員が何を基準にして水路をきれいにしようとするのかをうかがい知ることができる。農業用水の通水障害をなくすという基準に、ホタルの生育と飛翔を守るという、新しい基準を付加して考えているのである。農業用水の機能の増加ともいえるこのような意識変化が農業者にもたらされ、それに応じて行動が再編されたと考えられた。日常的に水路に対して関心が希薄と思われる都市的なマンション住民に対して、わざわざ声掛けをするという手間を必要と感じているのである。水の機能の変化に応じた水路掃除の意味づけや行動の変化は、他の集落でも同様にみられた。

このように、水路の清掃活動は自治会によって担われていることや、水路の様子は日常的に観察されていることがわかったのであるが、自治会の清掃は年に数回である。そのような頻度の清掃で水路や河川はホタルが生息する場として保全できるとは考え難い。どうやらこれらの活動に加えて日常的に保全をおこなう活動が存在しているようなのである。

2－2　ホタルの飛翔を下支えする日常的活動

日常的に水路の保全活動をおこなっているのはだれなのだろう。実行員会に参加しているB集落の自治会員のコメントを紹介しよう。

「私はホタルの保全のこと自体はようわからんけれど、自分のところの集落の水路のことや、うちの田んぼがある範囲の水や水路のことならいくらでも話せる。毎日水路沿いをあるいて田までいって、水や水路の様子は調べているから。これは自分個人の仕事やけれど、うちの集落の農業組合の仕事としては決められた水路の管理がある。水系の各集落で2か月づつ順番に回して水路の管理をすることになっている。これも毎日の仕事や。順番は水利調整委員会で毎年3月の年度末に取り決めることになってる。仕事の内容はごみをとったり樋を開けたりいろいろや。冬場の管理もやるので、一年中のことやから大変や。農家はもう7人しかおらんから負担が重いけどやっている。水路が詰

まってしまったら大変やからな。夏場は他の集落も手伝ってくれるけど、冬場は他の集落からの手伝いはないからほんまに大変や。この水路の上流にあるＨ集落では、この水を使う田が今はもうないから、その水がどんどんうちところに（Ｂ集落内に）流れてくる。私らがそれを掃除するんや」

年間を通して通水に責任を持ち水路を保全していたのは農業者だったのである。また、いわゆる灌漑期である夏場には集落外からの手助けもあるが、冬場は全く手助けが存在せず、数少ない農業者だけで、集落内のいろいろな水路を維持管理していることもわかった。農業者や田畑が減少していることで、年間を通した水路の保全活動に対して強い負担感があることもうかがえた。

他方で、上流部の田畑が減少すると、そこでの水路の保全者が不在になり、下流部に更なる保全や管理の負担が増加することもわかった。水路は各所でそれぞれが管理することで保全されていたのである。このように日常的に水路の管理を担う農業者が減少している現状を受けて、農業者から自治会へと管理主体を拡大していこうと働きかけていることも語られた。

「水路の保全活動をこの先ずっと私ら（農業者）だけでやっていくのは難しい。自治会にいっしょにやってもらえんやろうかと頼んでいる。今は、まちなかの水路は多くが暗渠化されているので、昔から農業をやっている者でないと、川筋や水路の構造、この水はどこから流れてきてどこへ流れていくのかということがほとんどわかってない。今のうちに自治会なりを通して誰かに引き継いでおかないといけないと思うんや。水路が保全できんかったらホタルも飛ばなくなるやろ。だから自治会にも市にも頼んでいるんですわ」

ここからは、水路を保全している農業者は、水路を保全するために必要な知識を自分たちだけで保有している現状に対して危機感をもっていることがわかる。水路を保全するために、農業者の間では当たり前にわかっていることを自治会へ引き渡し、より広く集落や流域で共有する必要性が述べられている。また、自分たちの集落の水路を保全することによって、ホタルが生息するための水を周辺の水路や下流部の水路に供給できるのだという。市内でホタルが飛び交う水路を維持するためにも、上流部の保全活動が大切だということがわかるコメントである。農業者や農地の減少は市内全体でも起こっているのだが、その他の集落や下流部の集落ではどうだろうか。異なる集落で実施されている水路の保全活動もみてみよう。

２－３　地元の水路や川を掃除する意味とその変化

ホタルの飛翔スポットとして現在は公園となっている三津川は、一本の川が北川、中川、南川に分かれている。ここは、かつて下流部の農業集落で頻発した水争いを解消するため、平等に分水する定石を置いた水利遺産の場所である。この公園や周辺の水路は地元のＤ自治会やボランティアが担っている。だが、いまでも下流部の農業集落では、自分の集落からこの分水点まで川を遡って掃除をするのが田植え前の恒例行事である。

灌漑が近代化される以前、水源や水路は関係全集落で維持管理していたからである。限られた水を公平に分配するために、そしてその流量をより多く確保するために、かつては集落総出で水路の泥をあげながら水源まで清掃をした。自分の集落から水路を遡りよその集落にある水源まで清掃する「ゆのぼり」といわれるこの行為は、水源に対する水利権の主張と同時に、水路の維持管理の責任を分担する意思表示を広く認知させるためにも重要な行為であったと考えられる。

だが、現在農業用水は野洲川ダムから必要な時に必要な量が供給されている。分水地は公園化され水路もコンクリート張りに改修されている。それにもかかわらず、下流部の各集落は相変わらず水路を遡って清掃するゆのぼりをおこなっているのである。その理由を下流部のＥ集落の農業者は以下のように述べている。

「昔からうちところの集落がこのあたり（日程）でゆのぼりをすることになってた。今はもう水路はほとんどの場所がコンクリートの三面張りになっているから、掃除いうてもすることはあまりない。だから、そんな風にしなくてもいいといえばいいんやけどな。やっぱり自分らが使っている水のことやから､やらないといかんいう気持ちがある。それに、だれもやめようとも言わん。昔は泥をあげて土手を壊さんように草も刈って、一日仕事でそれはたいへんやったけど、掃除のあとは（お酒を）一杯やってちょっとしたイベントやな、楽しかった。今はもう（ダムから）水がちゃんと来るし、（川が）改修されて泥が溜まることもないから、ちょいちょいっとごみを拾ったり草を刈ったり

くらいしか仕事はないからさっさと終わる。まぁ、川を掃除することはええことや、自分ところに流れてくる水やから。農業をやってる限りは続けるやろうけど、農地がなくなったらどうやろうな」

農業の水を確保するための水路や川の清掃作業は、集落総農家の時代においては重要な経済的意味をもった。だが、灌漑の近代化で管理の複雑さが軽減され、農業者はダム水が来る時期に灌漑をおこなえばよいのであり、日常的に水や水路を観察する必要はあまりないのである。それなのに、自分たちに関わりのある水だからという理由で、水路の清掃はやって当たり前だと述べているのである。それでも川掃除を続けるのは、以下のコメントにあるようにホタルが飛び交うような環境を保全するという根拠が、新たに与えられたところにあることがわかった。

「（水路の保全は）最近は農業の水やから、というのとはちょっと違うな。水はほっといてもダムから来るけど、（水路の保全を）しておかんとホタルが飛ばんようになる。だから、ごみも拾って、草は刈りすぎないようにして、それはもう工夫してうまいことやってる。ホタルが飛ぶのは毎年楽しみや。でも、こんだけやってても、それでも生き物のことやから、（ホタルが飛ぶのが）多い年もあれば少ない年もある。ちょっとしたことが影響するんやろうな。生き物はほんまに難しいわ」

このコメントからは、農業の水を確保するためにおこなわれていた水路保全の行為に、新しくホタルの生息域を守るという目的が加えられていることがわかるだろう。しかもホタルが飛ぶことを楽しみにしており、いろいろな工夫をしていることが語られている。このように、川掃除に新しい意味が付与されたことによって、水路を保全する行為に再び現代的な正統性がもたらされ、水路掃除は継続されているのである。

2－4　都市的な集落における水路保全活動

都市的地域である分水地の集落でも、まちの自慢のホタルが自分たちの集落で再び飛び交うようになり、同様の変化がおこった。ホタルの生息域を保全するという明確な目的が川掃除に付与されたことで、自治会の下部組織のなかに蛍・水環境の部会が新たに作られた。ホタル会という組織が作られた自治会もある。集落内を通過する水路がホタル河川に指定され、それに主体的に対応して自治会組織が再編されたのである。初夏にホタルが飛ぶ水路を維持管理することは、自治会に承認された活動として位置づけられ、ホタルのことは農業者だけでなく非農業者も含めた自治会全体のことと認知されたのである。

日常的な水路保全は主に農業者たちが担っていた。だが、農業のためという目的が変容した今では、その行為の意味をホタルの生息域を守るためであると読み替えることで、水路や河川の保全活動を積極的に継続していることがわかった。そして今でも水路の保全は、流域の各集落が各々執りおこなう必要な作業なのだと認識されていることがうかがえた。従来から今に至り変わらずおこなわれている川掃除や水路の維持管理の行為は、その機能が変化しても新しい意味づけが付与されることで継承されてきたと考えられた。

また、各集落で農業者や自治会が熱心に水路を保全している姿は、同市に県外から転入してきた若い世代に、水辺や水路を保全することが同市では重要な行為なのだということを認知させるデモンストレーション効果もあると考えられた。というのも、駅前のマンションの住民であるE自治会員は以下のように語ったからである。

「ここに来て（同市に転入してきて）、最初は不思議でした。なんでこんなにしょっちゅう川掃除をみんなしてるんだろうって。（この水路は）確かに街の真ん中なのにどぶ川でもなくて水がきれいなんです。そしたらホタルが飛ぶでしょう、今では当たり前って思っているけれど最初はびっくりしましたよ。私は生まれて初めてここでホタルをみました。今では川を見るのは自分も子どもも習慣になっています。川掃除してる人をみると、川を汚したらあかんって思うし、この人たちがホタルを守ってくれてるんやなって思います」

ここからもわかるように、現在では市内の水路や河川は、多様な人々から観察され関心を持たれる場になっている。ホタルが飛ぶ水路を保全することへの関心が高まり、水辺環境を保護する幅広い住民層が育ちつつあるのだと解釈することも可能かもしれない。

地域住民が水路で観察する内容は、水路の水量や濁り、ゴミの有無、餌となるカワニナの有無や降雨状況などいろいろである。河川は多様な住民から関心が寄せられる公共的な場となっていることも明らかであった。ホタルが飛翔

することが自分たちの暮らしをより豊かなものにしてくれるからである。

ここまでみてきたように同市には、日常的な水路の維持管理のための活動が随所にあり、多様な観察者が存在する。だから、イベントの際には 62 か所にもおよぶ地点で連日ホタルの飛翔調査を実施することが可能なのである。では、これらの点的な各集落の情報はどのように集められて流域という空間の情報に統合されているのだろうか。

3、点的な活動をサポートする重層的で広域なネットワーク

各自治会や農業者の環境保全の意志や水路の状況に関する情報は、一部を除いて、必ずしも常に下流部や上流部の自治会へと受け渡されているわけではない。自治会の活動を把握し流域として面的な活動になるように、情報を提供しているのは NPO である。地元密着型の環境活動を推進する NPO には地元の住民が多数含まれている。また、この組織の一番大きな特徴は自治会組織が会員となっている点である。このように市内の水路は、農業者、自治会や NPO メンバーというように重層的な観察者からみられているのである。

各自治会から持ち寄られた情報や課題は NPO で繋ぎ合わされ統合される。必要ならば話し合いの場も設けられるだろう。そして、課題などが再び各自治会に持ち帰られ、恒常的に双方間のコミュニケーションが図られている。このような構造になっているため、どの水路にカワニナやホタルの幼虫をどれくらい放流するかを相談し実施するという、年間を通したホタル育成の一連の活動も可能なのである。

また、市内の水路や河川では定期的に NPO が水質調査をおこなっており、NPO がいろいろな集落の水路に関わることも認知されてきた。集落の範囲ではなく流域を考えた協働が NPO のもとで展開されているから、都市のなかの河川や水路でホタルが飛び交う環境が保全されているのだと考えられた。

そしてその成果であるイベントの際には、日常的に水路を保全している農業者や自治会の負担が加重にならないように、市内外から多様な支援が提供される協働のシステムも NPO の下に作られている。同市には数多くの市民団体があるが、実行委員会には 5 つの環境保全市民団体が参加している。それらを詳細にみていくと、自治会のなかでホタルの再生、保全に特化した部会組織や、河川を健全に保つことを目的に活動している組織、またあるいは、地域の担い手となるために学ぶ場の OB 組織などである。

これらの組織はいずれも市内の環境再生や環境保全、または、地域づくりのために創設された現代的で目的指向型の組織である。現代的であるというのは、解決しなくてはいけない今の課題に取り組むために新しく作られたという意味である。農業集落の自治会組織のように地縁的な生活組織と対比すると、地域に縛られず自分たちの暮らしを取り巻く環境をよりよくすることを目的に活動する都市的な組織といえる。

以上、日常的な水路の保全活動の行為者を考え、それらを支え繋ぐネットワークについてみてきた。同市のホタルを鑑賞するイベントは、NPO が日常的な活動と都市的で現代的な市民団体を繋ぐことで実現できていることもわかった。このような関係を整理すると図 2 のように考えることができるのではないだろうか。

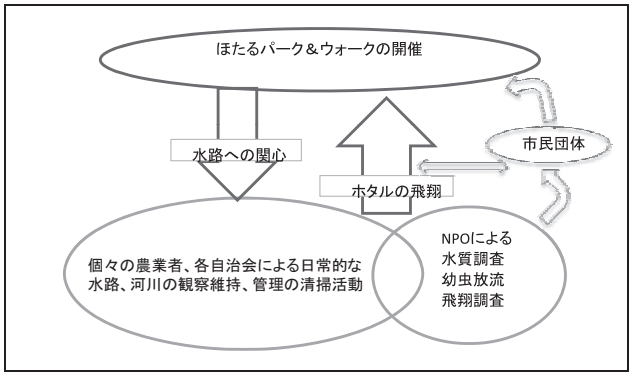


図 2　水路の管理主体構造とネットワーク

まとめ

本論では、かつてのまちのシンボルだったホタルの乱舞する水辺環境を再生し、地域活性化やまちづくりの資源としている守山市を取り上げて、再生されたホタルが生育できる水辺環境が、誰によって維持管理されているのかを明らかにするために、同市で毎年開催されているホタルのイベントを主催する実行委員会の構造を分析することを手がかりにして考察をおこなった。

そこで明らかになったことは、集落全体の水路の清掃活動は自治会の活動であるが、日常的なきめ細かい水路の保全は依然として農業者によっておこなわれているということであった。日常的に水路を維持管理しているのは、地元集落の農業者や個々の住民、自治会組織であったが、詳しくみていくと、各集落がおこなう水路の保全行為の意味付

けは再編されていたことがわかった。河川上流部にダムが建設される以前、各集落にとって水路の維持管理は経済的にたいへん重要であった。

だが、農地も減少し灌漑も水路も近代化された現在においては、農業集落の自治会による水路の清掃の意味や重要性は変化した。それでも各集落は地元の水路や河川の維持管理をやめることはなかった。水の機能が変化しても集落社会の行動は変化しなかったのである。むしろ継続する根拠を見出し新しい意味づけをすることで、慣習や行動規範を継続してきたのである。暮らしを豊かにしようとするこのような住民の創造性があり、ホタルが飛翔する環境は守られていることが明らかになった。

各集落でおこなわれているこういった各様の活動を、NPO が統合することで流域を考えた活動となっていることも明らかであった。現代的組織である NPO が農村的な自治会と市民団体を繋ぐことで、点的におこなわれる各自治会の活動を面にすることができたのである。このような背景がありホタルが飛翔する環境は「点」ではなく「面」として流域で保全することが可能だったのである。

また、ホタルを鑑賞するイベントを開催するにあたり、地域にある各種の市民活動が協働するネットワークがあることで、日常的に水路を保全している地元の負担を分散することが図られていた。水路を日常的に維持管理する農業者や自治会が基礎にあり、保全のネットワークが地域に賦存しているから、同市では恒例行事として 11 回にわたりホタルを鑑賞するパーク＆ウォークを開催することができたのである。その結果、多くの住民が水路やホタルに関心を持つ契機となり、水路を保全するすそ野が広がりつつあることも見逃してはいけない点であろう。

同市の調査は、水路や河川の維持管理はその機能や意味づけの変化に応じて、管理者が再編される必要があることを示唆している。資源管理においては、伝統的な地元組織を支える都市的で現代的な組織が必ず必要だということも考えられた。後者は重層的でもかまわない。そして、新しい活動や組織を作るのではなく、現存する活動の意味を変化させることで十分対応可能だということもわかった。

環境再生や自然資源の維持管理の問題は取りざたされて久しいが、同市の調査から学ぶことは多いと考えられる。同市ではホタルを観光資源に位置付けており、利益享受者が一般化しているという社会的な変化があるにもかかわらず、水路の維持管理は農業者や地元自治会が担っていた。だが、それを支援する仕組みも存在した。

水辺や水路、そこに生息する生物といった資源の維持管理を考えるならば、都市であったとしてもその中にある農業にまつわる機能が依然として極めて重要であることがわかる。基礎的な維持管理が農業由来の組織に担われていることを考えると、水辺環境の保全は水路のある集落や水路の行く先に農業が維持されていること、農業があり農業を営む生活者が存在することが大前提となる。だから、これ以上農地が急激に減少することや農業が衰退することは、水路や河川の維持管理の基礎部分を喪失させることに繋がる可能性があるといえるだろう。

地域の環境をはじめとする維持管理が必要な資源は、条例などの法的根拠を得ることでその保全の体制が作られるように解釈される側面がある。だが実際の保全活動や維持管理行為は、日々の暮らしのなかで営まれているのである。そしてそのような行為とは、歴史的に形作られてきた社会的な慣習や、またあるいは、その行為の意味づけといった文化的な側面から論じる必要のあるものだということがわかるだろう。

主要参考文

池上甲一「都市のなかのむらという問題設定」『都市資源のむら的利用と共同管理』年報村落社会研究 47、農山漁村文化協会、2011 年

柏尾珠紀「地域史から読み解く環境再生—滋賀県守山市の調査よりー」『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』第 10 巻第 1 号、2013 年

広報もりやま　NO.1120、1121、1122 号　2014 年

中田実『地域共同管理の社会学』東信堂、1993 年

日本村落研究学会編『むらの資源を研究する』農山漁村文化協会、2007 年

西城戸誠・黒田暁『用水のあるまち　東京日野市・水郷づくりのゆくえ』法政大学出版局、2010 年

認定 NPO 法人びわこ豊穣の郷ホームページ　http://www.lake-biwa.net/akanoi/

守山市泉町 hp　http://www.lake-biwa.net/moriyama-izumi/

守山市勝部町 hp　http://www.usennet.ne.jp/~kjitikai/

守山市 hp　http://www.lake-biwa.net/moriyama-izumi/

守山ほたるパーク＆ウォーク実行委員会会議資料　2014 年 2 月～ 7 月

認定 NPO 法人びわこ豊穣の郷 NPO ホームページ　http://www.lake-biwa.net/akanoi/

1）1988 年よりゲンジボタルは同市の正式なシンボルとされており、「ホタルのすむまち守山」という基本理念で都市作りがおこなわれてきた。詳しくは柏尾（2013）を参照のこと。

2）ホタル条例は「希少となっているほたるを保護し、繁殖させるための生息環境を整備し、保全するとともに、市民等の環境保全意識の高揚を図ることを目的とする。」とある。詳細については以下の hp を参照のこと。http://www.city.moriyama.lg.jp/reiki_int/reiki_honbun/i400RG00000258.html

3）条例の改正では、ホタルの森資料館周辺の河川がホタルの特別保護地区として指定された。

4）びわこ豊穣の郷の活動の詳細は http://www.lake-biwa.net/akanoi/about/ を参照のこと。

5）2004 年開始から 3 年間はこのイベントの名称は「ほたるパーク＆ライド」であったが 2007 年以降は「守山ほたるパーク＆ウォーク」と変更された。また、実行委員会組織は 2015 年より改変されている。

6）このイベントの開催期間中の週末は JR の駅前からホタルの森資料館やホタル河川をバスが巡回、運行する。現在では、約 4、5 万人の鑑賞者が県内外から訪れるようなイベントとなった。来場者数は各年で大きくばらつくが、その理由はホタルの飛翔数や開催期間中の天候に左右されるからであるという。

7）ホタルの飼育や水質調査等日常的な水辺の環境保全や維持にまつわる活動をびわこ豊穣の郷が主導的に担っている。